

2015年の年頭にあたって

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 岩田正美（日本女子大学）

大晦日の夕方、思いがけず大きな夕陽が沈むのに見とれ、しばし雑事を忘れしました。今日は一転して、東京も雪催いの元旦です。毎年、1年という区切りで振り返ると、さまざまな災害や事件が強く印象に残りますが、それは、平時は平和だからこそ感じることなのかもしれません。日々が生死の戦いの中にある社会や人々にとっては、1年を振り返ることすら意味を持たないでしょう。

1年を振り返ることのできる社会に在ることの有り難さの反面で、社会福祉を取り巻く環境を見ると、全体としての財政抑制、民間委託、「一般」と「問題を抱える人々」の相対比較といった手法が、結局日本社会の首を絞める結果になりはしないかとの危惧があります。

年末に購入した本の一つに、英国の John Hills の “Good Times, Bad Times -The welfare myth of them and us”があります。読む余裕がないまま放置していたのを元旦に手に取ってみました。まだパラパラ頁をめくっている段階ですが、「あいつらの福祉」のために「われわれが支払っている」という社会福祉神話が英国でも根強くあり、本当にそうなのかを反証しようとしたものです。1989年にテレビ番組が労働者家族と中産階級家族を代表する二つの家族を取り上げ、その2年後の追跡番組も含めて、後者が「勝ち組」になるという結果を示したそうです。この二つの家族は、実はテレビによる創作だったそうですが、Hills は、この作り物の家族のライフサイクルだけでなく、さらにその子や孫まで含んだ三代の長期の世代交代の中での生活の多様な変化-つまり good times もあれば bad times もあるような-と、その背景としての経済社会、人口構造、福祉政策の変化を実証資料によって挿入し、英国福祉国家が誰に何をなしたかを長期的に検証しようとしています。

詳しくは本書を参照していただきたいが、このユニークな手法による検証の背後に、ヨーロッパでは90年代頃から盛んになった長期縦断調査データの蓄積や、Hills たちも関わった社会的排除研究の成果があります。短期のスナップシ

ヨットデータでは中流家族が福祉国家に支払った額は、労働者家族が支払われ多額とほぼ同じですが、長期縦断的に計算すると、中流家族は多くを支払うと同時に、実は多くをバックしてもらっている。最終的には両家族の資産形成には大きな格差が生まれていると結論されています。

英国と日本では政策の違いもあり、縦断調査の量の違いもあって、現在の日本で同じような検証は難しいかもしれません。また国家財政債務問題があるので、日本での「神話」を打破するのは困難に見えます。しかし、『21世紀の資本』で話題のトマ・ピケティのインタビューが元旦の新聞（これも話題の朝日新聞ですが）に掲載されていたのを読むと、「国の借金がGDPの200%だとしても日本の場合、それは民間の富と一致します。対外債務ではないのです」（2015.1.1朝日新聞オピニオン）とあっさり言うのけ、だから民間資産への累進課税の強化がよい、累進課税とインフレの効果は同じだと強調しています。

こうした、大局的な議論に触れると、日本の社会福祉研究も縮こまらずに、もっと大胆で、長期的な視野に立つ議論が欲しいなあと思わずにはいられません。私自身も含めて、従来の研究の方法を大いに反省し、斬新な研究の主題や手法、実践の批判的検証を進めていきたいものだと思います。

さて、今年の学会は、春季大会（東洋大学）、秋季大会（早稲田大学）とも成功裏に終わりました。両校の実行委員会の諸先生、学生の皆様には多くの時間を準備や後始末に当てていただき、厚く御礼申し上げます。春季大会はこの間ずっと東洋大学にお世話になって来ましたが、2015年度からは、在京のいくつかの大学で分担していきたいと計画しております。

早稲田大会は11月末という遅い時期となりましたが、キャンパスの銀杏並木が黄色に染まる時期と重なり、韓国、中国の先生方は美しいと感嘆されていました。この大会では、日韓学術交流協定の再調印を行い、黒木委員長をはじめ国際交流委員会のご苦勞もあって、国際交流シンポジウムは隔年で秋季大会に両国で開催することとなりました。韓国大会での自由論題報告についてはこれまで通り春季大会での参加となります。この詳細は国際交流委員会からお知らせがありますのでご注意ください。さらに中国の先生も交えて、三か国交流のあり方についての話し合いも進められました。

学会運営については、5月大会以降新たな体制となったそれぞれの委員会も順調かつ意欲的な活動を行っております。学会事務局の全面委託についても、

滑り出しでアクシデントに見舞われ、一時期はどうなることかと心配しましたが、新しい担当の職員の方たちも本学会のやり方や文化に段々慣れてこられたようで、ホッとしております。年末には、岩崎総務担当理事と私が同席して、国際文献社社長より社内の業務改善についての報告を受けました。その概要については別途岩崎総務担当理事より皆様にお知らせすることになっています。委託関係は良好であることにこしたことはありませんが、緊張関係を持って、常に確認しながら進めていくことが大事だと思います。各委員会や地方部会、会員の皆様からも改善のご意見があれば、どうぞ積極的にお寄せください。

本年も学会への積極的なご参加をどうぞよろしく申し上げます。

2015 年元旦